

早稲田大学  
坪内博士記念 演劇博物館

梅雨空の午後、数名で“演博”を訪問した。日本における唯一の演劇博物館で、シェイクスピア時代の劇場・フォーチュン座を型取って設計された瓦ぶきの建物は、四角いビルが多い本部構内で異彩を放っている。昭和3年10月、劇壇の父と呼ばれ、また早稲田大学創設の恩人であった坪内逍遙博士が古稀の齢に達したのと、同時に半生を傾注して翻訳した『シェイクスピア全集 40巻』の完成を機に建設されたものである。建築意匠も逍遙自らの発案になる。建物は地階共4階建てで、展示室は8室、このほか逍遙記念室、図書閲覧室、書庫、事務室がある。ご多分に漏れず、ここ演博も建物が狭隘となったため、貴重本を中心とした資料と事務室の一部を隣の6号館校舎に移している。

展示はおおむね、能・狂言、人形浄瑠璃、歌舞伎、欧米演劇等7部に分れてい

る。折りしも訪れた日には、「芝居屏風絵展」、「E・ドラクロワ 連作ハムレット石版画展」などが催されていた。

展示会の他にも、講演会や演劇講座などの催しや、『演劇研究』や『演劇年報』などの出版物刊行の活動をしている。

図書資料の閲覧室は1階にあり、8席が設けられている。収蔵資料は広範な演劇に関する和・洋図書、雑誌、新聞、パンフレット等で、図書が11万冊余、芝居絵（錦絵）5万1千冊余、写真22万8千枚余である。このうち特別コレクションとして歌舞伎資料の役者評判記、歌舞伎台本、伊原青々園文庫や能楽資料の安田文庫、および逍遙博士旧蔵書に増補したシェイクスピア文献等がある。

和図書の目録カードは書名(アルファベット順)と分類、洋書は著者名と分類のそれぞれ2種類である。このほか和図書については機械打出しの冊子体目録を閲覧室に置いている。分類は独自に工夫しており、総記、国劇(歌舞伎以降)、能楽、狂言、偶人劇(人形浄瑠璃)、音楽、歌謡、楽劇舞踊、民俗演芸、外国劇、シェイクスピア劇、公共劇、学校劇・児童劇、映画、放送劇、草双紙、逐次刊行物および一般書に分け、これをさらに内容によって細分化している。

利用者は、文学部に演劇科があるため専攻する学生が多いが、一般にも無料で開放しているので決して少なくない。

「餅は餅屋」と言われるが、当館にはとても及びもつかないコレクションに驚嘆し、さらなる充実・発展を祈って、若き日に徘徊したキャンパスをあとにした。

(参考課 相島 宏)